

目業務及び総係費から556万5,000円を減額し、職員人件費、燃料費などの補正でございます。

水道4ページをお開き願います。3項特別損失につきましては、704万5,000円の増額で、清水町浄配水場用地の売却に係る登記手数料、導水管及び地下ケーブル移設費、立木及びブロック塀撤去費用などの経費を計上いたしましたものでございます。

水道5ページをごらんください。資本的収入及び支出につきましては、収入の1款2項固定資産売却代金は、現有土地資産相当分162万3,000円を計上いたすものでございます。支出の1款1項建設改良費につきましては、1目事務費から職員人件費を9万9,000円減額いたすものでございます。

以上、よろしくご審査賜りますようお願い申し上げます。

る年だなど、このように考えております。ことしも残すところ100日そこらになりましたけども、早くこの災害年を終わってほしいなと思っておる心境でございます。

私は、長井市のまちづくりが後世に、いわゆる次世代に負担の残らない、ツケの回らない行政運営を願いながらこのたび予算総括質疑をさせていただきたいと思っております。

先般、文教常任委員会におきまして管内の学校を訪問させていただきました。ちょうどお昼の時間帯が豊田小学校でございましたので、子供の皆さんと一緒に学校給食を食べさせてくださいというお願いをさせていただきました。委員長のお計らいで、子供たちと一緒にではなかったんですけども、教職員の一部の方々と一緒に久しぶりに給食をちょうだいしました。一口に言えば、本当は褒めたいんですけども、必ずしもおいしかったと、すばらしくおいしかったとは言えないわけございまして、おいしい尺度が子供たちと私とでは大分違いがありますので、その点については別問題でありますけども、しかしながらこういう食事を食べていれば大人の皆さんも健康でいられるんだなということだけは実感をした次第でございます。

特に私はお昼の時間は、おつゆというんですか、みそ汁はまず食べたことがないんですけども、学校給食ではみそ汁が出ました。旬の里芋と大根が入っていたような気がします。しかしながら、みそ汁なのか、薄味過ぎて本当にわからないというような状況で、塩分は1日1グラム以内に下さいよというのが全国的な教え、勧めでございますので、それに従っておられるのかなと思いました。

その中に、最後に、みそ汁の中に残ったものがございました。沈殿したものでありますね。それは黒いやつで、これはまさしく煮干しの粉というようなことで、ああ、こんなにやっぱり学校給食というのは栄養のバランスに気をつけ

+

平成23年度長井市各会計補正予算案に関する総括質疑

+

- 佐々木謙二委員長 概要の説明が終わりました。これより質疑を行います。
ここで、総括質疑の発言通告がありますので、順次ご指名いたします。

町田義昭委員の総括質疑

- 佐々木謙二委員長 順位1番、議席番号9番、町田義昭委員。
○9番 町田義昭委員 おはようございます。
ことは1月、2月の豪雪、3.11の大震災、そして夏の酷暑、台風12号、これからの15号の被害というようなことで、休みなしの災害のあ

ているのかなというようなことを感じた次第でございます。カルシウムをこんなにたくさんとっていると、しかも今度、牛乳もついているわけでありますので、本当にいい感じだなと、そんなふうに思った次第でございます。

そんな給食を食べさせていただいたおかげで、学校給食についても、そんなに関心なかったんですけども、一度質問させてもらいたいなという意欲をかき立ててくれました。そんなことで、きょうはテーマは一つなんでありますけども、浅い質問をしますので、深い答弁をいただきたいなど、そのように考えております。

学校給食に地場産品を生かせる方法はないのかというようなことで、このことにつきましては、多くの議員の皆さん、そして先輩議員が幾度となく質問をされてきた記憶がございます。しかしながら、その質問に対して一回も正式な、そして正確な答えが議員全体に返ってきたということは私は記憶にないなど、そんなふうに思っております。この学校給食というのは何か聖域なのかなと、そんなふうに思ってしまうほど反応がない、またそれに対して議員の方もさらに突っ込んだ質問をしていったという記憶はないわけでございます、この点についても少し内容をお聞きしたいなど、そんなふうに思っております。

この学校給食でやはり、特に地産地消とか、あるいはレインボープランの野菜を使ってくれないか、あるいは自校給食をして長井市の地場産品を使っていったらいいじゃないかというような質問が多々なされたと思うわけでありますけども、現在学校給食に、長井市で生産された、野菜に限らないわけでありますけども、加工品、そういうものがどの程度使われているのか、学校給食共同調理場長にお聞きをします。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 町田議員のご

質問にお答えいたします。

学校給食における長井市産の産品、加工品も含めましてどういうものを使っているかというお尋ねでございます。今現在、まず米ですね、これはレインボー認証栽培米、これが100%でございます。それから卵、これもほぼ100%でございます。それから地場の加工品といたしましては、みそ、しょうゆ、豆腐、コンニャク、油揚げ、ポークフランク、これはハムですね、それからコイの柔か煮等につきましては地場の加工品、長井市産のものを使わせていただいております。それから青果物につきましては、長井市産の使用量が比較的多いものの品目を申し上げますと、大根、白菜、キュウリ、長ネギ、キャベツ、里芋、リンゴ、サクランボというところでございますが、総使用量ベースと、使用率ということで申し上げますと、これは平成21年度、なぜ21年度かと申し上げますと、22年度は調理場の大規模改修で給食、26日ほど休止しておりますので、通年ベースということで21年度総使用量ベースでは、長井市産のものというところではおおむね10%には満たない弱と、山形県産というくくりではおおむね30%弱というところになっております。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 このような話を聞いたことは私は初めてでありまして、意外と使われているんだなと、私はもっと使われていないのかなと思ったんですけど、意外と使われておるなと、それが実感でございます。米100%ということはわかっておりましたけども、卵とかみそ、しょうゆ、そういうものを使っていたということについては敬意を申し上げたいなど、そんなふうに思います。

また、牛乳はそうじゃなかったのかなと、今ちょっと思い出してるんですけども、前には牛乳も使われておったように記憶してるんですけど、現在、この間、パック見て、そこまで、私、

+

牛乳を飲めませんので印を注意深く見たということでございませんでしたので、牛乳はどうなっているんですか。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 牛乳につきましては、安定供給という観点から、山形県のほうで一括契約しております、山形県産の原乳を使った牛乳を提供させていただいております。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 大分前、私が議員をさせていただいたのがうん十年前でありますので、昭和の時代後半には、あのころにはまだ酪農家も長井市にもたくさんおったわけで、今とは全く様相が違うと思うんですけども、あやめ牛乳というようなことで、これは補助事業でそうしたたぐいの消費拡大というものがなされたというふうに今思い出しております。

また、特に今までレインボープランの野菜を使っただけでないかとかいろんなことで、青果物のところだと思うんですね、一番問題になるのは。さきにお聞きしたんですけども、レインボープラン協議会の方、一部の方に、試行というようなことで提供をさせていただいたことがありましたと。そのときに例えば大根100本を下さいということで納入したんですけども、一応中身がどうなってるかということで検査して、ぱんと割ったときに、いわゆる鬆が入っておったというようなことで、一本鬆が入ったことによって100本全部取りかえてくださいというような指示を受けたと、そういう指示を受けてしまうととてもレインボープラン協議会の弱小組織では交換し得ないもんですから、市場の方ですともう一発で交換できますよという状態になりますので、レインボープランの野菜は提供できなくなったんですというようなお話をお聞きしましたけども、そういう検査というんですか、中身はどうなっているんだというチェッ

クですか、そういうものはどういう段階で、またどういふ方がなされているのか場長にお聞きします。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 青果物の検収ということだろうと思いますけれども、青果物の検収につきましては、基本的に納品時、基本的には青果物については新鮮なものを使うということで当日の朝になりますけれども、産地あるいは衛生管理状況等を確認しながら、学校栄養士、今は栄養教諭と学校栄養士おりますけれども、その者が確認をさせていただいております。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 そういう状態でやはりチェックをなされるということは、それは念には念を入れてということだと思いますので、恐らく小さな組織の長井市産のものを使うということはずっとできないのかなと、そのように思っておるわけで、こういう状況の中で、じゃあどうしたらそういうものができる環境をつくれるのかなというふうに思ってるんですけども、納入業者の方が市場から購入してくるということでもありますので、せっかく菜なポートができているわけで、菜なポートを窓口にした状況をつくっていくことができないものかなと私は思っておるんですけども、菜なポートだって同じく長井市民の皆さん、消費者の皆さんにこれは間違いないですよということで大根100本なら100本出しておるわけですね。それが例えばその中の1本がたとえ鬆が入っておってもその100本そっくり交換するということはなさらないと思うんですよ。そうしたときに、菜なポートを窓口にして、そこでこれならいいですよというオーケーをいただいたものは使用するなんていうことは可能なんでしょうか。場長にお尋ねします。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 まず、一つ検取時の検査ですけれども、これは学校給食衛生管理基準に従いましてチェック項目がありますので、それに従って検査をさせていただいております。先ほど申し上げましたように、野菜につきましては基本的に当日か前日ということになりまして、基本的に検取してから2時間ほどで調理をして搬送しなければなりませんので、その時点で全数の検査をその段階でするわけには恐らくいかないだろうということで、サンプル検査にならざるを得ないところもあるのかなと思っております。

それから、菜なポートの活用等のお話ですけれども、実はことしの10月28日に、食育と地産地消というような観点から、基本的にというか、先ほど申し上げました牛乳と塩とか砂糖を除いてすべて長井市産または長井市で加工した給食メニューの提供を考えております。その際の野菜の調達につきましては、今現在は内々に虹の駅を通してどういったものを調達できるかということで把握させていただいておりますけれども、虹の駅だけで調達できない場合には恐らく菜なポート、そういったところを利用して調達していただけるのかなど。こういったことが1年を通じてできるかどうかですけれども、まずはこの10月28日、実施させていただいて、いろんな問題とか課題とか出てくるのかなど考えているところでございます。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 やはり青果物が長井市産のやつが10%というのは決して高くはないだろうなと私は思います。どの程度のパーセントに上がれば十分だという物差しも持ってないんですけども、そんなには高くないというようなことで、こういう状態がずっと続いてきたと、生かされてこなかったということについてはそれ

なりの理由があったのではないかなと私は思いますけれども、教育委員会関係でこうしたことについて今まで議論をなされてきたことがあるのか、あるいはなぜ生かされる環境になかったのかということについても教育長のほうにお聞きをしたいと思います。

○佐々木謙二委員長 大滝昌利教育長。

○大滝昌利教育長 地場産の青果物がなぜ今までこういう状態だったのかということで、教育委員会の方でも何か検討した、話し合いをした経過があるのかというようなご質問だと思いますが、県のほうで出してる山形県食育地産地消推進計画というのがあります。これ平成23年度から27年度までのものなんですが、これなんかを見ましても、県内産の野菜を使ってるのが平成21年度で32%ぐらい、そして27年度までに5%ふやすというような計画になっている。ということは、恐らく県内全域、県内産野菜で5割以上賄ってるということはないというふうな状況なんだと思います。教育委員会の方でもやっぱり地産地消を進めるために学校給食共同調理場の運営委員会というのがありますので、そういうところでも話題にしながら話し合いをしてきたんですが、何分学校給食の場合は短時間の勝負ですので、やっぱり規格とか数量、そして品質、価格、給食費の問題もありますので価格の問題、そういうものをクリアできないとなかなか使えないという状況もあって、今現在ではバイキング給食とか旬の数量の確保できるもの、そういうものなんかを使っているというふうに話を聞いています。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 教育長からは法的な、特に学校給食法に基づいて、また県の指導に従ってやってると、いわゆる県の平均的なところ、標準的なところまでは達成してるんだと、だから支障はないということ。やっぱりこういう考え方でいけば地元のをさらに使っていくた

+

いなとか、いかなければならないなというような発想が出てこないわけだね。議論する必要のないわけだ。だからずっと今まで流されてきて、私たちも、ああ、そうですかというようなことを申し上げてきたと思いますけども、やはり一歩踏み込むということをしていかないと、まず考えていかないとならないのではないかなと私は思っておるわけで、次の産業の振興との関連性というようなこともありますけども、特に今回の3.11を契機にして大分私たちの食に対する考え方も変わってきてるんじゃないかなと。ならば目に見えるもの、ならば近いもの、そういうものを求めようとする志向が強まっていると。やはり目で確かめるといのは一番自分にとって信頼されるわけで、そういうことも素早くキャッチしてほしいなというふうに私は思ってるんで、そういうことで、特に将来の子供たちに対して安心・安全なものを言葉だけでなくで態度で示していくというような考え方を持たなきゃならないかなと私は思ってるんで、特に、どこの自治体も同じなんですけども、教育の振興、子供を大切にしようというところには重点的な施策を講じておるはずでございまして、そこも含めた食育と、そういう学校環境をつくらうという考え方は、これから議論するとか、そういうことは考えてないんでしょうか、教育長。

○佐々木謙二委員長 大滝昌利教育長。

○大滝昌利教育長 先ほど私が答弁したこと、ちょっと誤解されたのかなというように感じするんですが、現状はさっき私が申し上げたとおりです。今、町田委員からご指摘もあったように、やっぱり食の安全という面では、今現在も顔の見える農業とか顔の見える食材ということでやっぱり安心感の持てる食材を使用するという面では地産地消といいますか地場産品の利用の拡大というのはぜひ必要ですし、ただ学校給食としてまとまった食材を納入する段階で、先ほど申し上げましたけども、短時間で、しかも衛

生的にもクリアした状態で学校の方に搬入しなけりゃならないという、そういう状況の中で、例えばジャガイモのサイズがばらばらだったという場合には非常に調理にも時間がかかると。そういう面では規格もそろったもの、また数量も確保できるようなもの、たまに返品があったときに返品にも対応可能なもの、そういうことを考えていくとなかなか今現在の状況では大変だと。そういうことをやっていくためにはやっぱり組織化するというか、きちんとした条件整備、組織化とかコーディネーターとか施設設備を整備するとか、そういうふうなことで安全なものを日常的に納入できるような体制づくりが必要んじゃないかなというふうに思っています。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 今、教育長が体制づくりが必要じゃないかと言われたんですけども、全くそのとおりだと思いますよ。今までそういう体制づくりをしてこなかった、する気もなかったと言った方が私は当てはまるのではないかなと。やはり規格のそろったものでないといけなとか、あるいは当日になって間に合わないような状況をつくってはならないとか、そんなことは百も承知なわけですね。しかしながら、それをいかにして実現できる環境を整えていくかという議論というものが必要なわけで、私は今、長井市でそういう受け皿をできる環境にあるんでないかなと思ってるんで、特に野菜関係を作付している農家の皆さんがものすごくふえているわけで、間違いのない品物を提供できる環境にあると、その品目においては、すべてができるとは思っておりませんので、そういう受け皿を菜なポートあたりの生産組織が引き受けていってくれるのではないかなとか、そういうものが発展的に物事を考えていけないものかなと私は思っているんで、学校給食に消費拡大のために子供たちにその品目を与えていくという、そ

ういう考えは私はさらさら持ってないわけで、やはり新鮮なもの、旬なもの、旬にまさるものはないと聞いておりますので、そうした環境を何としても整えたいなど。

例を挙げれば、ミニトマトなんか学校給食では使い切れないほどとれてるわけですね、規格のそろったものがどんどん東京に出荷されてるわけですね。だから、一品目だと恐らくそれはやっぱり面倒くさいからとか、そういうことで処理されるものもあるんじゃないかなと私は思ってるんで、一つ一つやっていかないと、100の品目を全部一気にそろえなきゃならない、そういう納入環境だということであればこれは永久にできないわけで、やはりできるものから、3年に1品目でもいいから、ミニトマトだったらできるよとか、あるいは生産者組織のほうに先ほど教育長が言ったようにジャガイモ何キロを年間どれくらい提供してくれますかと、そろえていただけますかと、そういうやっぱり話し合いという場を持つたりしていかないとこのことは進んでいかないのかなと、そういうふうに思っております。

それぞれの自治体がさまざま趣向を凝らしていることも事実だと思いますし、私はほかの自治体のまねをしてくれという話はするつもりはありませんし、そんなことをする必要ないと思います。長井市は長井市の納入組織があるわけで、それを十分に生かしながらやっていただければいいわけで、JAさんあたりと組織、行政が契約して納入していただいているなんていうのは南陽市さんとか、あるいは鶴岡さんとか、だんだんとふえているようです。私はそこまでは申し上げませんので、一考して、考えていただきたいなど、そのように今思います。この点について、教育長、いかがですか。

○佐々木謙二委員長 大滝昌利教育長。

○大滝昌利教育長 納入組合というか納入団体をつくるということは町田委員の方もそこまでは

というようなお話もありました。納入団体をつくるということではいろいろな問題もあって、クリアしなければならない問題があるんだと思いますが、そうじゃなくて単品でもいいから地場産のものを使えないのかというようなお話です。私も給食調理場の現場、ちょっとよくどういうふうな調理をやっているのかというのがわかりませんので、その辺については調理場の方とも話をして、本当に安全で安心なもので単品でも提供できるというものであればやっぱり積極的に取り入れていくという考え方はしていかなければならないというふうに思っています。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 それぞれの自治体で特色を出しながらこの学校給食を子供たちに食べていただいて、そして喜んでもらいたいというようなことでやってる例があるわけですね。東根市のサクランボ、寒河江市のイチゴとかね。あるいは前には南陽市のいわゆる、私も古いものですから、小姫ブドウね、デラウェアですけれども、そういうものをやられて、あと山辺の舞米豚ですか、あれはえさに米をまぜて、それで生産された山辺の豚肉を使用してるとか、そんなことで特色を持っておるわけで、それは特産物があるから子供たちに提供していくというだけのことで私はないと思うんですよね。特産をつくっていかうとすることによって子供たちに与えていけるということで、長井市の特産を子供たちに食べていただくことによってつくられるかもしれないと、そういう可能性だってあるわけで、そういう意味で、何か長井市の、じゃあミニトマトを食べていただくかなとか、あるいはちょっと浮かばないんですけれども、庄内でいえば、だだちゃ豆とかあるわけで、今ぱつと浮かばないんですけれども、そういう発想ですか、そういうものをぜひ考えてほしいなと思いますけど、この点についていかがですか。

○佐々木謙二委員長 大滝昌利教育長。

○大滝昌利教育長 地場産品の利用を拡大するというこでの子供たちの影響といたしますか、これについて私はかなりあるんじゃないかというふうに思っています。今、長井市では長井の心の育成をやっているわけですが、やはり地元のもの愛するとか、地域を愛する、そういう心、あとは感謝の心とか、そういうものをはぐくむためには大変やっぱり食育というのはいいい教材だなというふうに思っていますので、地場産品利用の拡大のために、それがまた長井市の特産品になるというようなこともあるというようなお話ですので、そういうふうな考えのもとにやはり給食の食材の提供というのを考えていかなきゃならないなというふうに思います。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 この間、豊田小学校で給食を食べさせていただいたときに、たまたま中秋の名月だったんですね。それでゴマ団子を少々ちょうだいしたわけで、ちょうどそのときにも各校舎、教室に流れておったわけですね、「どういことできょうはゴマ団子が出たか知ってますか、皆さん」というようなことで、「きょうは中秋の名月でこういうわけです」ということで。私も、ああ、そうだったのかというようにうれしくなった次第でございますけれども、そういうことも一つの教育の現場なのかなと感じた次第でございますので、急に一遍に取り組んでいただきたいということはないわけでございますけれども、やはり1年以内に何かをしてみたいとか、1年以内にこれぐらいは取り組んでみたいとか、そういうことはぜひ考えてほしいと思いますし、来年の9月の議会ときに楽しみにして、一つは何かあったなというふうに期待をして、この項目については終わりにしたいと思います。

この次の4番目のつや姫の年内提供でありますけれども、つや姫と書いてしまったんでちょっと誤解を受けやすいなど、本当は米のつや姫と

書かないと何か町田はまた変なこと考えてるなというようなことを言われそうだなと思いたので、これは今、山形県が総力を挙げてブランド戦略を行っている新品種のつや姫についてでございます。

希少価値戦略ではえぬきが簡単にいえばブランド戦略に失敗をしたという大反省のもと、このつや姫は定時定量、そして一定の品質、規格というようなものを前面に打ち出して、今、つや姫ブランド化戦略推進本部というものを立ち上げて知事が先頭に立って頑張っておられるわけでありすけれども、知事が先頭に立ってこのブランド化に向けてやっておられるということは、山形県がそういう体制でいるということでございます。私たちもその家族の一員でありますので、何らかの協力はしなければいけないのではないかと、また何が私たちにできるのかというようなことを考えたりもしたんですけれども、学校給食につや姫を提供してはいかがかということをお願いしているんですけれども、このつや姫に関しては、5年もすると学校給食にも満遍なく行き渡るんじゃないかなと私は思っているんですけれども、しかしながら、このブランド化戦略にお手伝いをできるという環境は先手をとってやっていった方がいいときもあるというようなことから、私はこのつや姫を子供たちに先駆けてこの秋に新米を供給、提供できないものかと、そんなふうを考えております。この点について市長のほうから答弁をいただきたいなと思います。

○佐々木謙二委員長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 お答えいたします。

町田委員からございましたつや姫を子供たちに食べさせてはどうかということでございます。私もそれは大賛成でございます。今まではえぬきを、これはスポット的ですが、絶対量が足りないんで、またご承知のとおり学校給食というのはいろんな網がかけてありまして、学校給

食会の方で米なんかも規定してます。それははえぬきの2等米が基準でありますので、そうしますと差額が30キロ、半俵で1,500円前後あるようでございます。現在、長井市の場合はレインボー米を食べていただくということで、差額が80万円、これは市で補助いたしまして、そして納品する業者さんと話をし、その差額を払うからこれを入れてくださいという形をしてるんですね。そういう制約がございますけれども、今まで実施した市町村というのは、県内では寒河江市と河北町、庄内町、大江町、鶴岡市、酒田市の平成22年度に、昨年度ですけども、実施してるようでございます、6市町で。市といたしましても、今年度ではなくて来年度になるかと思いますが、何回実施できるかは別として、食べたことないお子さんって結構いらっしゃるんじゃないかというふうに思いますので、その差額の部分をやはり市で補助するという形で、スポット的に1回とか、あるいは何回か、ぜひ検討してまいりたいというふうに考えております。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 前向きな答えをいただきまして、ありがたいなと思っております。何回も、毎日とか、そういうことは必要ないと思うんですね。やはり年数回とか、そういうことによっては、今、山形県が一生懸命になってるおいしい米はつや姫という米なんですよというようなことも、皆さん、おいしかったですかというようなことの問いかけをして、そしてその答えをいただくということによって、子供たちはそのつや姫というものをずっと覚えておってくださるんじゃないかなと、そんなふうに思っているわけで、この県挙げてのブランド化にぜひ、小さな協力になるのか、あるいは大なる協力であるのか、それはわかりませんが、していただければいいのではないかなと、そんなふうに思いますし、市長のほうから前向きな答えを

いただきましたので、ぜひ実行をしていただきたいと、そのように思います。

次の5番ですけれども、この項目については微妙な項目になるわけございまして、先般、竹田議員の一般質問の中にも牛肉の消費拡大とか米沢牛云々というようなことで、牛肉の学校給食は年1回ぐらいが精いっぱいだとかいうような話があったわけで、その点について場長のほうからちょっと詳しくお聞かせください。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 お答えいたします。

学校給食における牛肉の使用の関係でございますけれども、毎年秋の芋煮等のメニューで1回か2回程度の使用実績となっております。この理由につきましては、1食当たり、小学校252円、中学校297円という限られた給食費という制約もございまして、なおかつ近年は国産牛は高価でございまして、なかなか使用がままならない実態にございます。食肉を使うといたしましても、どうしても豚肉、鶏肉の使用頻度が高くならざるを得ないというのが現状でございます。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 そうしますと、値段的に合えば使っていきたいんだという理解をしてよろしいんですか。

○佐々木謙二委員長 齋藤環樹学校給食共同調理場長。

○齋藤環樹学校給食共同調理場長 先ほど申し上げましたけれども、この10月28日に長井市製の給食、「まるごと長井給食」を予定しているわけでございますが、その際に長井市産、米沢牛の長井市産の牛肉を使わせていただく予定です。ただし、これ使います際には60キロ以上必要になります、米沢牛。ということは数十万円かかるということでございまして、ほかのメニュー

等をやりくり算段して何とかできそうだということで実施させていただくというのが今のところの実情でございます。

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 私は米沢牛の消費拡大とか、そういうことで学校給食に提供したらいかがでしょうかということさらさら考えていないわけで、この米沢牛のブランドと申しますのは、ちょうど狂牛病の発生のときに3大ブランド牛に米沢牛が昇格したわけですね、松阪、神戸、米沢というようなことで。このブランド化については、それぞれそれこそ並々ならぬ努力があったはずですし、またこれを維持をしていくということについては、なった以上に協力体制をしっかりとしていけないと、産地は回るという言葉もありますけれども、ブランドから落ちてしまうということだと思っております。私もこうした仕事を少しさせていただいた記憶がございますので、やはり今、補償の関係で米沢牛の価格がこうとかああとかということはあるんですけども、それとは全然別に、やはり米沢というこのネームバリューというのは長井市にとってもすごく大事なんでないかなと、私はそんなふうに思っております。まちづくりにしても観光事業にしても、全国におけるネームバリューといったときに、この米沢というものは長井市にとっても大事なんだろうと、その米沢牛の多くを担っている長井市の生産者の皆さんにも貢献できるなど、そんなふうに思っておるわけで、横道にそれですけども、たまたま私の子供が西日本の方に行っているもので、30歳過ぎてからようやく向こうで米沢牛をいただいたということなんです。私は養豚業でありましたので、牛肉は食べさせたことがなかったものですから、非常に今思うと寂しい、貧しい環境だったなと思っただけなんですけども、そのときのやはりおいしさが忘れられないというようなことで、ずっとサクランボを贈答しておったんです

よね。それが今、米沢牛に贈答品としてかわってきてるというふうなことで、やはり何らかの形で全国に発信できるものはあるんだなと。それが毎年毎年子供たちが卒業するわけで、その中で何割かは県外に行っていたときに、やはりそうした山形の特産というものをPRしていただける環境にあるというようなことで、行政だって手伝っていても悪くはない事項だろうと、そんなふうに思って、私は、米沢牛の提供というのは、確かに費用対効果を考えたときにはどうなのかなという部分はありますけども、せっかくの置賜の特産、そして山形の特産でありますものを年1回であっても提供されたいかがですかねということをご提案を申し上げたいなと、そんなふうに思っております。

やはり先ほど場長言ったとおり、グラム七、八百円するんでしょうね。去年までだと、恐らくオージービーフとかそういう、国産の安いものであっても三、四百円はするわけありますので、400円ぐらいのグラムの差は当然出てくると思います。単純にちょっと計算したんですけども、1人当たり40円の差があると、280円ですね、それが2,600食だから72万8,000円、それが安いかわいいか、それは市長、どう考えるかわかりませんが、そうしたものの生かし方というものについて市長の考えをお聞かせください。

○佐々木謙二委員長 内谷重治市長。

○内谷重治市長 お答えいたします。

このたびの予算総括で町田委員の地場産品を学校給食に生かせないかということでございまして、私もこれは最大限の努力をしていかなきゃいけないだろうというふうに思っています。私も平成11年ぐらいから4年間、続けてではないんですが、学校給食の調理場運営委員会の委員をさせていただきました。江口委員も同じ、2年ぐらい一緒だったと思いますが、その中で、今回町田委員からのいろいろご意見といたします

か議論していただいた内容につきまして振り返って考えてみますと、例えば長井市産が加工品はほぼ100%、農産物も10%というのは、これは驚異的だと思います。10年前ぐらいはほとんどなかったです。それに唾然と私もしましたし、6月定例会で江口委員からもありましたように、本当に町田委員がおっしゃるように、旬の野菜を、そして安全・安全な地場のものを提供したい、例えば伊佐沢の小学校で自校給食できるんなら伊佐沢のスイカを旬のものを学校給食でとか、そういったことができるわけですね。例えば長井小学校だったら金井神のイチゴ、ちょっと高いですけども、ということ是可以るわけですね。しかし、10年前ぐらいまでは、まだ残念ながら、レインボープランの推進協議会では頑張っていたいていました。栽培いただける農家がレインボー米も少なかったんですね。それを何とか面積を確保していただいで供給していただいと。野菜は供給できるような体制でなかったと思います、多分10年、15年ぐらい前は。それがようやくいろんなハウス栽培なんかも盛んになって、これは町田委員おっしゃるとおりです。

そういった意味で、これからもっともってそれをしていかなければいけないと、それは教育委員会、教育長の方も申し上げましたように、いろいろ努力していくということでございますが、例えば今回、10月28日、長井市産デーみたいな形で学校給食、長井市のもの、オール長井でという取り組みを、これみずからやったってすごいことだと思いますし、あと栄養士さんも大分当時から考えれば理解をいただいでいるというふうに思っています。つや姫もやっぱり町田委員がおっしゃるように子供たちに食べさせたい。子供たちは当然、食べたことないお子さん、たくさんいらっしゃると思うんですが、家庭に帰って、きょう学校給食でつや姫を食べたらうまかったということのうちへ帰って家族の中で

話すわけですね。そういったことが大切だと思いますし、あと米沢牛、おっしゃるように50万円ぐらいかかるんですね。町田委員がおっしゃってるのはもう少し、ランクA5の一番上のやつぐらいがやっぱり70万円、80万円かかるんですが、それでも50万円ぐらいと見ても1食当たり200円近くやっぱりアップするわけです。ですから、これは行政として、あるいは生産者のほうからも協力をいただきながら、JAとか黒牛の生産組合あたりからもご協力いただいで、牛肉まつりも去年からやったわけですから、そこでやっぱりお金を市でも出して食べていただいでるわけですから、子供たちにもそういったことをぜひ考えていきたいなというふうに思っているところでございます。ぜひその際は長井市の米沢牛と、そこでちゃんと米沢牛の生産は3分の1、4分の1だけでも品質は最高なんだと、チャンピオン牛を出してる長井市の米沢牛だよということをPRしながら子供たちに食べさせていきたいなというふうに考えております。

+

○佐々木謙二委員長 9番、町田義昭委員。

○9番 町田義昭委員 牛肉まつりも去年から始めたわけで、あんなに美味しいものを大人が食べてるんだから私は子供に食べさせられない理由はないと、そのように去年感じたんですね、このことは。それはそれなりの費用はかかると思いますけども、費用対効果というのは、その当時だけの費用対効果を求めるのか、あるいはずっと先まで考えた費用対効果を求めるのかということで物差しは違ってくるわけでございますので、ぜひ実現してほしいなと、そのように思います。今、そして同じ米沢牛と申されましたけども、市長もどうせ米沢牛を使うんだったらやっぱり1級品を使いたいと、それは本当にそうだと思います。米沢牛の中においたってさほど国産と変わらないような部位もあるわけで、せっかく食べていただいたのにあれが米沢牛だ

ったのかなんて後で思い出されるような状態ではやっぱり寂しいなと思いますので、この点も含めて前向きに答えをいただきましたので、楽しみにしていたいなと、そんなふうは今思った次第でございます。この学校給食が日本にとりまして、また長井市にとりまして、子供たちは長井市を背負う宝でございますので、しっかりと受けとめて育てていって、甘やかすことなく、このことについて市民挙げて努力をしていきたいものだなと、そんなふうを考えております。

る質問を申しあげましたけども、久しぶりに浅い質問が深い答弁をいただいたことに感謝を申しあげまして、質問を終わりたいと思いません。ありがとうございます。

江口忠博委員の総括質疑

+

○内谷重治市長 次に、順位2番、議席番号3番、江口忠博委員。

○3番 江口忠博委員 予算の総括であります、まず質問に入る前にちょっとうれしい話をさせていただきたいと思えます。

ことしの夏前からですが、グリーンカーテンを市の職員の方々、一生懸命頑張ってくつてくださっていました。聞くところによりますと、収穫量も1,000本を超えたと、大収穫だったようではありますが、それを市民課の窓口で一生懸命配っていただきまして、市民の方から大変好評を博しているということをお聞きしました。市民課長も大変お喜びでありまして、窓口が明るくなったということでありました。クーラーが入る予定だったのが入らなかったというのが非常に職員の方々にはお気の毒だったわけですが、その功を逆に奏しまして、市民の方と行政が少し距離が縮んだというような感じも

するわけです。本当によかったなと思いますが、つるを取り去ったり網を取ったりということもこれからあるんでしょうが、ぜひ事故のないように、市民課長さん、よろしくお願ひしたいと思えます。本当にいい話だなと思って先日お聞きしたところでした。

きょう私の質問は、市民直売所について、菜なポートについての質問をさせていただきます。また、レインボープランコンポストセンターがとまってしまったことについての質問等々ございますが、また欲張ってしまいまして、ちょっと多目の質問を用意してしまいました。市長はじめ課長さんにおかれては、簡潔な答弁をくださいますようお願いを申し上げたいと思えます。

1番目の質問であります、実験店舗として、これまでの調査と研究のデータ、そしてまた今後のシミュレーションはどのように考えていらっしゃるかというようなことをちょっとお聞きしたいと思うんです。市のホームページを見ますと、「市民の市民による市民のための直売所」という言葉が、今もうたっておられます。開設当初からその言葉がずっと出ておりましたけれども、この直売所、どんなものかなと、市民の市民による市民のためのという言葉の意味するところはどういうことかなんてことをちょっと考えてるわけです。生産者も市民でありますし、消費者も市民、運営する側の当局の方も市民というふうに考えますと、それこそ協働のまちづくりのいい形とも言えるわけですが、これまで市民の声というものをどんな方法で聞き取って、そしてどんなふうこの経営に反映させてきたのかということもお聞かせ願ひたいのです。市長はこの直売所に関しては売り上げの額を伸ばすということに汗をかくという、それよりもまず農家の所得であるとか生産物の出荷量であるとか、つまり農家の生産意欲が増して、そして耕作放棄地の減少につながることも大事な目的であるんだということは立ち

+